

(別紙4)

富山県における効果的な捕獲に係る技術開発計画/評価報告
(効果的捕獲促進事業)

1 対象指定管理鳥獣の種類及び技術名

指定管理鳥獣名	ニホンジカ
技術名	GIS等を活用した越冬地把握と効果的な捕獲技術の開発
実施体制	富山県、富山県自然博物館ねいの里、(一社)狩猟屋
事業費	9,000千円

2 現状の指定管理鳥獣捕獲等事業による捕獲の目的・目標、実施状況、効果、課題等

ニホンジカについて

捕獲の目的：農林業被害の防止及び生態系への悪影響の未然防止

目標：年間の捕獲目標数 43頭

実施状況、効果、課題：

有害捕獲のほか、指定管理鳥獣捕獲等事業により県内8地区10チームにおいて捕獲を行っており、ニホンジカの捕獲数は増加傾向となっている。指定管理鳥獣捕獲等事業による捕獲目標も達成しており、一定の効果があると思われる。一方、推定個体数についても大幅に増加しており(R1:1,160頭⇒R5:3,667頭)、より捕獲圧を高める必要がある。

また、個体数が急増しているものの、近県と比較すると低密度な状態であり、捕獲が困難なこと、また山林域のアクセスが困難な地域での捕獲となることから、より効果的・効率的な捕獲技術が求められている。

注：捕獲等事業によって目指す地域の状況や、軽減したい被害に関する目標、そのために必要な密度低減の考え方や捕獲数、捕獲の実施状況・効果・課題等を記載すること。

3 開発技術の目的・必要性・具体的な内容・効果等

開発技術の目的・必要性：越冬地の把握及び越冬地での効果的捕獲技術の確立

具体的な内容：

①GIS等を活用した越冬地の把握

- ・GPS首輪をニホンジカに装着し、移動ルートから越冬地を把握する(R6~R7)。
- ・併せてGISを活用して越冬地となる要因(積雪、地形等)を分析し、より広範囲の越冬地の推定を試みる。併せて、推定された越冬地で現地調査や自動撮影カメラ調査などを実施し、検証を行う(R7)。

②越冬地での効果的捕獲技術の開発・検証

- ・①で把握・推定した越冬地において、冬季に越冬地に適した捕獲方法(積雪を活用した銃による少人数での群れ全体の捕獲など)による試験捕獲を行い、捕獲場所のアクセス面なども含め、検証を行う。(R6~R7)

想定される効果：

狩猟を含めた冬季の効率的なニホンジカ捕獲(費用面、人的コスト面)が可能となる。また、積雪が少ない年は捕獲数が少なくなる傾向があるが、積雪が少ない場合の越冬地が把握できることで、毎年継続して捕獲を実施することができる。

注1：開発技術の具体的な内容については、開発方法、開発体制、技術の特徴、開発場所、開発日程、導入効果、成果目標、有効性、普及性、既存の技術との比較など分かりやすく記述すること。

注2：開発する技術の仕組み等が分かる資料を添付すること。

注3：2を踏まえて技術開発の目的・必要性を記載するとともに、想定される効果等記載すること。

注4：事業終了後の評価報告においては注1～3について実施した内容・結果を記載すること。

4 技術の効果の検証・評価方法/結果

- ・既存の捕獲専門チームなどによる冬季の巻き狩りによる捕獲実績等と比較し、捕獲効率などを評価する。
- ・富山県野生鳥獣保護管理検討委員会において、学識経験者や狩猟関係者などから事業全体の評価を受ける。

【令和6年度までの結果について】

①GIS等を活用した越冬地の把握

○季節移動型の個体の事例（2023年7月27日放獣個体・メス成獣、図2）

- ・調査期間は令和6年4月1日から令和7年2月28日（334日間）。
- ・夏季と冬季で全く違う地域を行動圏としていた。主に針葉樹のスギ植林地（39%）を利用し、次いで落葉広葉樹のコナラ群集（34%）、ミズナラ群集（24%）などを利用していた。カーネル法による行動圏（95%）34.71 km²、コアエリア（50%行動圏）は4.86 km²。
- ・積雪のあった令和6年12月19日に標高約600mから大きく北側へ移動し、12月21日には雪の少ない越冬地となる地域（標高約100～150m：直線距離約12km）を行動圏としていた。ただ、1月18日と1月25日にやや南側へ移動し、再びまた北側の越冬地へ戻るなどの行動も確認された。
- ・令和7年2月4日以降に大雪となったが、越冬地などを中心に行動していた。
- ・2年間継続して調査できたメス個体であるが、連続してほとんど同じような地域を越冬地として利用していることが分かった。

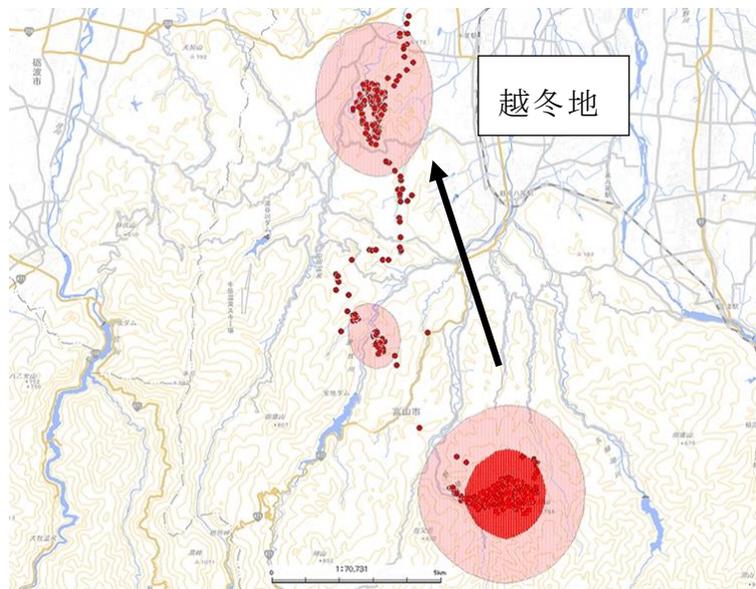


図 カーネル法による行動圏（95%薄い色赤色）、コアエリア（50%濃い赤色）

②越冬地での効果的捕獲技術の開発・検証

○GPS首輪の位置情報を活用したシカの銃器捕獲について

- ・位置情報を活用した銃器捕獲により、7頭のシカを捕獲した。
- ・積雪期の銃器による捕獲であればメスを選択的に捕獲ができる可能性が高く、4頭がメス個体で、3頭はオス個体（幼獣1個体含む）となった。残念ながらオス個体の捕獲があったのは、幼獣（角がなく目視では判断が難しい）個体によりオスと判別でき

なかったことやオス個体が待ち場に先に多頭数来た場合はどうしてもオス個体に発砲することになったことなどが理由であった。

- ・積雪期に成獣メスの位置情報を取得できれば、これまでの経験と勘だけでなく、確実なデータを活用し、ほとんど探索せずに効率的にメスジカの捕獲活動ができる。（通常の積雪期の捕獲活動は足跡の追跡の探索に時間と体力が必要になるほか、イノシシの捕獲が主体となり、オスジカを確認すれば捕獲するなど、メスジカのみを選択的に捕獲することが難しい。）
- ・GPS首輪を装着したシカの群れだけでなく、積雪期に地域によっては越冬地として他の群れを確認することもできるため、多頭数捕獲の可能性が高まる。
- ・シカの行動圏を把握することで、夏季と冬季（越冬地）の両方での効果的な捕獲圧を通年検討することができる。また、地域の剥皮被害や下層植生衰退度にあわせて、適切な捕獲場所の選定にも活用できる。

注：3を踏まえ、実施結果の確認方法や目的・目標に対する開発技術の効果を図るための指標（被害指標や密度指標等）やその収集方法、評価の方法等について記入すること（事業終了後の評価報告においては、その評価結果を具体的に記入すること。）。

5 技術の活用・普及方法、その他

注1：技術開発に当たって、特記すべき事項があれば記入すること。

注2：事業終了後の評価報告において、特記事項に対するコメントがあれば記入すること。

